
沈黙の螺旋-Spiral of Silence-

Murphy21'

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沈黙の螺旋 - Spiral of Silence -

【Nコード】

N8837I

【作者名】

Murphy211

【あらすじ】

1999年7月。中学生、上野信吾達は相沢高原の林間学校を訪れる。

日頃の厳しい受験勉強から開放された彼は、想うがままにキャンプを満喫していた。

そんな中、信吾達第二班は自由行動で通りかかった山中で、偶然に殺人現場を目撃してしまう。その夜からクラスメート達が次々と失踪して行き…

消えた彼らに共通するのはある日記で…？

出口の無い失踪事件、追いつめられてゆくメンバー…。
そう、すべてはあの原点から…。
血塗られた螺旋が静かに廻り始める…。

相沢林間学校

すべては螺旋だ。

愛情、友情、敵意、誤解、信頼……。

数え切れない線が絡み合い、美しい謎色を描きながら廻る。

一つの線のみが成す事其無意味、だが一度交われれば結果を生み出すだろう。

すべてを解ほどかない限り螺旋が崩れることは無い。

一つずつ、ゆっくりと、出来る事ならばじっくりと。

すべては同じ原点。

そこからすべてが廻り出すのだ。

起点も終着点も

最期は二つに一つ。

貴方が決めた事なのだ。

貴方の望む事は、貴方自身解きかけた線を再び結ぶことだ。

貴方が欲しいのは本当に其か？

貴方自身の手を使って結ぶのか？

貴方の手に入れたモノすべて手放してまで？

その綺麗な髪を見てごらん。

滴したたるは皆の涙じゃないか。

その大きな瞳を見てごらん。

自分を許せない悔いに満ちた眼まなこじゃないか。

その白い手を見てごらん。

最期に残るのはどうせ血じゃないか。

貴方の螺旋が再び廻り始める。

P 2 1、5 - 2 1。

目が覚めた。

普段ならそのままかまわず二度寝だが、今は妙に意識がハッキリしていた。

何時から寝ていたのか記憶がなく、感覚的には眠ってたんだ、と疑問形式が適切だろう。

右腕に巻かれたお気に入り色の青色の機械式腕時計を見た。

最後に認識した時間から1時間弱は経っているが、さっきから何も変わっていない様子が山道が延々と続いている。

そんな単調な景色だからこそ眠ってしまった訳で、目を開けば情景に多少の変化が出ると期待はしていたが、実際な所は何の特色のない森一面。

単調に揺れ続けるバスもあまり乗る機会がないので、最初の内は友達とのトークやらで楽しかったものだが、続くとネタの在庫切れでメッキリ会話は途切れ、次第に飽き、やがて苦しみにさえも感じられた。

しおりの上の予定時刻表示だともうすぐ付くらしいが、あまりにも視覚的变化が脆弱な為、どうも今ひとつ疑問に想ってしまう。

まるで先に終点が無いかのようになり、どんどん奥へ奥へとバスは進み続ける。

やはり着くまでもう一眠りしておこう…。

そう考えた刹那、パシャッ、という清脆な音と共に眩しい白光が睨越しに目を射した。

白光の刺激は一直線に俺の脳と目の奥を同時に貫き、まだ微かに居座っていた睡魔を瞬時に浄化した。

さすがにいきなりの事だったので、半反射的に身を思いつきり引き、爽快な音を奏でて後頭部を窓に強打させた。

そんな俺の馬鹿げた動作を傍に、クラスメートの浅野ミナモが隣席で可カメラを構えて、実に甘い笑顔で可愛らしく笑っていた。

「イタタタタ…脅かすなよミナモ」

「そんなに驚かなくても良いのに。どうです、これで少しは目が覚めましたか？」

中学生にしては幼げな、所謂ベビーボイスで彼女は俺にそう言った。

「ああ、この脳震盪レベルのキツイ一撃は効いたぜ」

「そろそろ着くみたいですよ。風音ちゃんかざねがそろそろ皆を起こすよ
うにっつて」

「こっついう起こし方ってありか？」

「ちゃんと起きたじゃないですか」

彼女の小悪魔の様な笑顔と共に、サラサラと流れるような長黒髪も笑っているかの様に靡なびいた。

「ふ…まあ確かにな。出来れば付いてから起こしてくれれば良かったんだが。正直この緑のアーチは懲り懲りだ」

辺りを見回して見るが、寝ていたのはどうやら俺だけでは無い様で、大体の奴も撃沈していた。

この景色を絵画ににすれば、それはそれは素晴らしい情景画になるであろうが、何時間と続けば、無意識であつても寝るのが普通だろう。

俺達若者に何得一見の景色を堪能せよと言われても、荘厳さはまだしも、今一つ魅力が無し、むしろ強力な催眠術だ。

おまけに朝五時起床、六時校庭集合だったんじゃ起きてるなんてまず無理だし、拷問に値する。

「何言ってるんですか、絶景じゃないですか。私なんかずっとこの景色に見入っていたんですよ」

「…一時間以上も良く飽きないな」

「綺麗じゃないですか。それにワクワクするんですよ」
確かに彼女の言葉と同じく、目線が完全に遊園地に連れて行っても
らえる、期待に満ちた子供の目になっている。

キラキラと輝いている、と言うよりは、もう火が付いてしまった的
な雰囲気だ。

そんな最中、暴睡中の皆を委員長の林原風音がせつせと前方でゆす
り起こし始めているのが目に入った。

相当忙しいようで、5メートルは離れていようにも関わらず、はつき
りと大粒の汗が額に満ちているのが目に入った。

「まったくご苦労さんだな」

「何しろ生真面目ですからね、風音ちゃん」

「あれで鎮圧癖がなければ最高なんだがな」

風音はミナモトが言う通り生真面目な上面倒れことが嫌いなのか、ホー
ムルームでは俺のようなクラスの反抗分子を完全に鎮圧する。

「信吾君が幼稚な事投げかけてるからですよ」

「俺は率直に意見を言ってるだけだ」

それこそ幼稚だとミナモトに指摘されているのは自分でも理解してい
る。

風音のその鎮圧姿勢は時々嫌味に思うが、それがクラスとしての多
数派意見だろうし、彼女も別に高飛車と言う訳でもない。それに一
直入刀な彼女の性格も魅力の一つと俺は想っている。

「あれ、てことは予定より早く着きそうだな」

今更ながら確認してみると、しおりの予定時到着時刻よりは20分
近く早かった。

「そうみたいですね。地図によると後少しすると大きな滝が見えて、
その隣の坂を登れば着くみたいだよ。…溪谷でしょうか、これ？」

「ふーん。この景色が溪谷に短時間で変わると言う想像図がいまい
ち浮かばないな」

「でも山って色々なものが詰まった宝箱みたいですし、何が目の前

に現れても不思議じゃないですよ」

「にしても随分と山奥に入ってきたな。一面同じ様な景色ばかりじゃないか。これがあの有名な富士の樹海、か」

「こんな森のど真ん中に林間学校ですか…。実に不思議な感じですね」

「だよな。普通はそこいらのキャンプ場なのに」

「まあまあ。学校の好意だよ。私達を受験勉強から隔離させたいんじゃないの?」

俺とミナモの前に座っている、茶色いポニーテールの雪乃ゆきのありな有紗がシートを乗り上げ、俺達の方を向いて言った。

…何時の間に。

「寝てたんじゃなかったの?」

「あの一撃の爽快な音で爽やかに目覚めたよ。いやあ、実に快感」
ヒヒヒと、白雪姫に毒りんご食べさせる事に成功した魔女のような笑い声、或いは奇声を上げる。

確かに人の不幸を見て好機嫌に笑う姿は、美少女の皮を被った魔女そのものだ。

爽やかな目覚めと快感の背景にどれ位の痛みが有るのかぐらい分かっていた上で言ったのも良い証拠だ。

そんな俺の心の叫びと嘆きが聞こえたのか、ミナモが口元を押さえながら軽く、囁く様に笑い、続けた。

「確かに良い意味で森の中に閉じ込められたみたいだね。こんな中でキャンプなら、本当に受験なんて思い出す機会さえ無さそうだね」

「まあ…これじゃまるで社会から隔離されるみたいだぞ」
「んな大げさな」

「そりゃ大げさに聞こえるかもしれないが、割と本気なんだ。こんなコンディションで台風でも来てみる、こんな山奥にへりは無理だし、人力なんてドラごえモンが完成する位に時間を食らうだろう。

俺をそれを懸念しているのだ。危機管理って奴だ」

「世間は単にチキンとも呼ぶ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8837i/>

沈黙の螺旋-Spiral of Silence-

2010年10月9日04時16分発行